

一般演題（口演）

■ 2025年11月2日(日) 14:50～15:30 ■ 第6会場

[O] 一般演題（口演） 「医療事務・教育・研修・実務実習」

座長:岩城 正宏(近畿大学 名誉教授), 佐々木 智道(株式会社メディカルシステムネットワーク 薬局事業本部 薬局教育部 次長)

[O-6-29]

マイナ保険証から得られた収縮期血圧 ≥ 130 の拾い上げの取り組み～循環器病アドバイザー資格を有する医療事務による検討～

○島岡 ちひろ¹, 西垣 賢^{2,3} (1.サン薬局法隆寺北店, 2.(株) 関西メディコ 地域政策部, 3.健康ハートの日実行委員会 運営部会)

[O-6-30]

小児領域の研修体系と服薬指導への影響

○本田 賢, 荒井 玲美, 山本 楓美, 弓削 吏司 (日本調剤 (株))

[O-6-31]

効果的な研修資料作成のための認知症薬に関する調剤薬剤師の理解度調査

○宮島 永^{1,2}, 鈴木 麻衣子³, 柴田 和美⁴, 久田 彩永⁵, 齋藤 優子⁶ (1.(株) MCCマネジメント 人材開発部 人材事業推進課, 2.(株) ココカラファインヘルスケア ジップファーマシー港明調剤薬局, 3.ココカラファイン薬局ミタス伊勢薬局, 4.守山白山店, 5.垂水店, 6.ガーデンシティ舞多聞薬局)

[O-6-32]

(株) トモズ在籍の薬局薬剤師における一般性自己効力感とかかりつけ薬剤師業務との関連

○佐治 公寛¹, 浅羽 広寛² (1.(株) トモズ 薬局トモズ 青葉台店, 2.薬剤部)

一般演題（口演）

2025年11月2日(日) 14:50～15:30 第6会場

[O] 一般演題（口演） 「医療事務・教育・研修・実務実習」

座長:岩城 正宏(近畿大学 名誉教授), 佐々木 智道(株式会社メディカルシステムネットワーク 薬局事業本部 薬局教育部 次長)

[O-6-29] マイナ保険証から得られた収縮期血圧 ≥ 130 の拾い上げの取り組み～循環器病アドバイザー資格を有する医療事務による検討～

○島岡 ちひろ¹, 西垣 賢^{2,3} (1.サン薬局法隆寺北店, 2. (株) 関西メディコ 地域政策部, 3.健康ハートの日実行委員会 運営部会)

【目的】早朝高血圧徹底制圧宣言2025では、薬局などでのキオスク血圧測定において、収縮期血圧(sBP) ≥ 130 mmHgの場合、家庭血圧測定を呼びかけ早期対策を促している。一方、2025年薬局・薬店血圧啓発企画「血圧測ろうぜ！」では130mmHgをキーポイントとして啓発活動を計画中である。壮・中年層は高血圧が徐々に増加し始める時期であり、将来の健康リスクを防ぐためにも早期発見が重要となる。本研究では壮・中年層をターゲットとし、医療事務によるマイナ保険証を活用した効率的・効果的な疾患啓発方法を検討した。

【方法】2025年4月1～14日の期間中、サン薬局法隆寺店(耳鼻科門前)および法隆寺北店(整形外科・眼科門前)にて、マイナ保険証から特定健診情報が取得可能であった患者を対象とし、血圧の数値と来局状況を調査した。20～59歳をA群、60歳以上をB群とし、来局日時などの特徴を分析した。

【結果】調査対象患者数は401名(A群97名、B群304名)、そのうちsBP ≥ 130 は195名(A群29名、B群166名)、sBP ≥ 140 は98名(A群10名、B群88名)だった。このうち特定健診情報の既往歴の項目に高血圧と記載のあった患者はA群0名、B群33名であった。A群の来局タイミングは平日の18時以降および土曜日が多く、B群は平日の9時～18時が多い結果であった。さらに、A群のsBP ≥ 130 mmHgであった29名について来局タイミングを検討したところ、土曜日が38.0% (11/29)と最多であった一方、平日18時以降は6.9%(2/29)と少ない傾向を示した。

【考察】今回の検討から非内科門前薬局では、土曜日に血圧啓発活動を実施することで、ターゲット層(20～50代)に働きかけることができると示唆された。また、A群ではsBP ≥ 140 mmHgでも既往歴に高血圧記載がなく、適切な受診行動に繋がっていない可能性がある。特定健診情報からのsBPや既往歴確認は医療事務でも可能であり、薬剤師の受診勧奨に繋げることで受診・治療促進に有用な情報となり得ると考えられる。

一般演題（口演）

2025年11月2日(日) 14:50～15:30 第6会場

[O] 一般演題（口演） 「医療事務・教育・研修・実務実習」

座長:岩城 正宏(近畿大学 名誉教授), 佐々木 智道(株式会社メディカルシステムネットワーク 薬局事業本部 薬局教育部 次長)

[O-6-30] 小児領域の研修体系と服薬指導への影響

○本田 賢, 荒井 玲美, 山本 楓美, 弓削 吏司(日本調剤(株))

【目的】対物業務から対人業務への重要性が議論される中、薬学教育モデル・コア・カリキュラムには「状況に適した薬物治療を計画立案し、薬物治療を実践する」ことが目標に掲げられ、求められる資質の1つに「自己研鑽」が挙げられている。しかし大学教育で小児と成人の服薬指導の差異を習得することは容易ではなく、現場での自己研鑽では小児の体系的な学習方法を見つけることが難しく、小児薬物療法認定薬剤師の受講枠も限られている。加えて近年在宅業務やフォローアップ等の業務が浸透し、勤務時間内に職員間で服薬指導の議論・研鑽の時間を確保することが難しいことが、状況に適した薬物治療実践の障壁になっていると考えた。そこで今回、小児に適した薬物治療実践のためとなる研修が、状況に適した薬物治療実践の一助となるか調査した。

【方法】当社2022年度新卒入社薬剤師を対象に小児薬物療法研修会の概論や小児特性を中心とした1回15分程度のビデオ研修を計8回実施。研修後に実施した服薬指導が、小児の特性を把握した内容に繋がったかを受講者に報告させ解析。

【結果】研修前は疾患や薬剤特性などの薬学的な知識不足が指導の枷と捉えている職員が多く、要因として学習方法がわからないという意見が多くを占めた。また半数以上は研修内容に薬学的な知識の充足を求めており、小児特性やコミュニケーションスキルといった薬学的とは別の知識を求めていたのは1/3に満たなかった。研修後も薬学的知識の充足には不十分という意見が最多を占めたが、小児の特性を学んだことで服薬指導における接し方が変わり、フォローアップのきっかけとなり、保護者から信頼を得ることが出来たとの報告も多く受けた。

【考察】短時間の小児特性の研修受講に加え実践結果を報告させる形式は、保護者や児からの信頼獲得、フォローアップへの展開に繋がるなど、小児に適した薬物治療の助けとなりうると思われる。

一般演題（口演）

2025年11月2日(日) 14:50～15:30 第6会場

【O】一般演題（口演）「医療事務・教育・研修・実務実習」

座長:岩城 正宏(近畿大学 名誉教授), 佐々木 智道(株式会社メディカルシステムネットワーク 薬局事業本部 薬局教育部 次長)

【O-6-31】効果的な研修資料作成のための認知症薬に関する調剤薬剤師の理解度調査

○宮島 永^{1,2}, 鈴木 麻衣子³, 柴田 和美⁴, 久田 彩永⁵, 齋藤 優子⁶ (1. (株) MCCマネジメント 人材開発部人材事業推進課, 2. (株) ココカラファインヘルスケア ジップファーマシー港明調剤薬局, 3. ココカラファイン薬局ミタス伊勢薬局, 4. 守山白山店, 5. 垂水店, 6. ガーデンシティ舞多聞薬局)

【目的】抗認知症薬はアルツハイマー型認知症を中心に用いられる薬剤であり、患者の認知機能の維持や行動心理症状の軽減に一定の効果を示す一方、抗認知症薬の適応症や用法用量などについて理解度に差があり、適切な患者ケアに影響する可能性がある。本調査では、抗認知症薬に関する調剤薬剤師の理解度を把握し、理解度に合わせた今後の研修資料作成を目的とした。

【方法】2025年1月及び2月に実施した研修対象者の調剤薬剤師に、貼付薬を除く抗認知症薬（以下、認知症薬）及びレカネマブの理解度に関する理解度調査を実施した。内容は、認知症薬及びレカネマブのMCIへの適応、認知症薬及びレカネマブの適応症、認知症薬の用法用量、認知症薬の分類について、専門知識を有する弊社認知症研修認定薬剤師4名に調査項目の協力を仰いで作成し、選択式で構成された20項目で実施をした。対象者は981名で有効回答数は707名（有効回収率72.1%）であった。

【結果】全20項目中11項目において、カイニ乗検定による有意差が認められ、認知症薬の用法用量に関する項目においてはすべての薬剤に有意差があり、ステップアップする期間及び用量の正確さの理解度が低く、また、認知症薬及びレカネマブのMCIへの適応に関する項目においても、ドネペジル以外では有意差があった。有意差のなかったドネペジルに関しては、MCIに対して適応があるとどの階層においても回答をしており、全体でも75.5%がMCIに適応があると回答があり有意差が出なかった。

【考察】認知症薬の正しい理解は、薬物療法の適正使用だけでなく、患者への関わり方や服薬支援にも深く関係する。本調査から、階層別従業員の間で理解度に有意差があったのは、特に、用法用量に関する項目であり、有意差が合った項目を中心に今後の階層別に合った研修資料の内容への落とし込みを行い、理解度向上に即した研修資料の構築が必要と考える。

一般演題（口演）

2025年11月2日(日) 14:50～15:30 第6会場

「O」一般演題（口演）「医療事務・教育・研修・実務実習」

座長:岩城 正宏(近畿大学 名誉教授), 佐々木 智道(株式会社メディカルシステムネットワーク 薬局事業本部 薬局教育部 次長)

「O-6-32」(株) トモズ在籍の薬局薬剤師における一般性自己効力感とかかりつけ薬剤師業務との関連

○佐治 公寛¹, 浅羽 広寛² (1. (株) トモズ 薬局 トモズ 青葉台店, 2. 薬剤部)

【目的】近年、薬局薬剤師はかかりつけ薬剤師の機能を果たすことが求められているが、かかりつけ薬剤師指導料の算定率は低い割合にとどまっている。社会学習理論における概念である一般性自己効力感（以下、GSE）は、尺度を用いて得点化することで課題に対する個人の行動を予測できるという特徴がある。本研究の目的は、GSEとかかりつけ薬剤師同意取得経験（以下、同意取得）の関係を明らかにし、かかりつけ機能の発揮につながる研修・教育方針策定の一助とすることである。

【方法】2025年5月2日～2025年5月10日に、薬局トモズ在籍薬剤師を対象にGoogleフォームを用いて匿名アンケート調査を行った。調査項目は参加者属性やGSE、同意取得の有無、保険薬局勤務経験年数（以下、経験年数）とした。GSEの指標として一般性セルフ・エフィカシー尺度（以下、GSES）を用いた。経験年数3年以上の回答を抽出し、既報を基にGSES9点以下を低得点群、10点以上を高得点群とした。群分けに基づき、GSESと同意取得の関係についてカイ二乗検定を行った。また、経験年数が長いほど同意取得の機会が多いことを考慮し、同意取得を目的変数、GSESによる群分けと経験年数を説明変数としてロジスティック回帰分析を行った。

【結果】カイ二乗検定の結果、高得点群（ $n=41$ ）は低得点群（ $n=134$ ）よりも同意取得がある割合が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。ロジスティック回帰分析の結果、GSES得点（OR=2.420、CI=1.050、5.56、 $p<0.05$ ）と経験年数（OR=1.410、CI=1.050、1.90、 $p<0.05$ ）が同意取得と有意に関連していた。尤度比検定の結果、本分析モデルの有意性が示された（ $p<0.001$ ）。

【考察】結果はGSEが同意取得に影響することを示唆している。GSEは変動するものであることが知られており、向上させるための働きかけ方が確立されている。これらのことから、GSEはかかりつけ機能発揮につながる研修・教育方針策定の一助となる可能性がある。